

Leech BRO × Azul for ADULT ONLY





天国を

寸止め

休日前夜



いい加減に
しなさい



お前たちが
中出しの
後処理をして

処理で済んだ
試しがない!

んー
それは

アズールがその
いやらしい身体で
誘うからでしょう?

そーだよ

アズールが指
ぎゅーってするから
もっかい!って
なるんだもん

とにかく

今夜は中出し
禁止だ!



ふーん……？

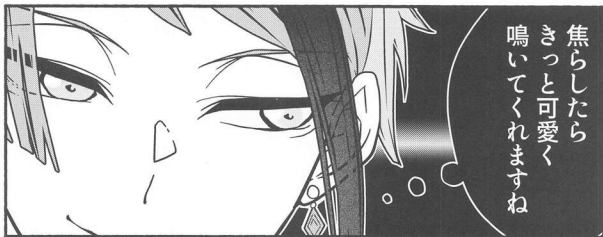
まさ
しいけど

僕も構い
ませんよ

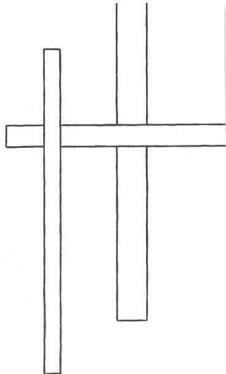
宜しい



アズールが
イク前に
抜けばいい
んでしょ



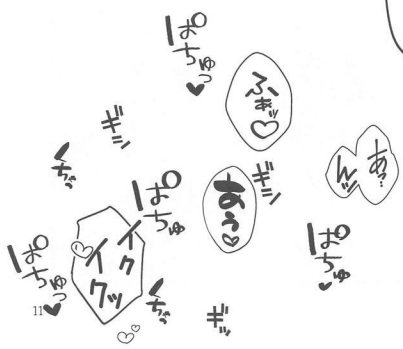
焦らしたら
きつと可愛く
鳴いてくれますね



洗ってる最中に一回
洗い終わったら一回
再び洗ってる最中に……と
延々終わらない挿入に怒り

二人に中出し禁止を
言い渡してから数時間後——

アズール







あんなにきつく
抱きつかれては
抜く前に中で
出てしまいます
からね

あっあっあ♡

やだっ

158

159



イク時の
ギンギン
ないと

は
は
は

本イキ...
できない

ひく

焦らせないで
もお出してよおっ♡

おや?
出すな

...と仰つたのは
あなたですよ

おっ♡

160

14



え？？
なに？

中出し禁止とか
言ってたじゃん

やあ！

ひっ
あああっ！

まふ

ししはないつ

はやく……っ
中でイって！

ブクッ……

ちゃんと
イかせてえ！！

僕たちは忠実に
アズールの言い
つけを守って
いるのに……

酷いですねえ？

びく
びく
るる……

まって！

だめ……
ジエイドっ

抜いちゃ
やだ！

僕のなかで
扱いてよおっ

きめ
そんなの
いいから





覚悟してね♡

天国にイかせて

※強制禁欲
※結腸責め

アズールが纏う空気には最近まったく余裕がない。いつも何かに急いでいるが、成果が上がった時の満足そうな笑みも浮かべない。彼の両脇をさりげなく固めている双子がそれに気がつかないはずがなかった。二人はアズールを心配して労わり、そんなに働いたら倒れてしまつと優しく言い諭す——ような真似は決してせず、アズールを両側から抱え込むようにして、校舎内の狭い部屋に押し込んだ。

「なんですか。邪魔する気なら離れていてもらえます？ 授業が終わったらやるのがたくさん……」

不機嫌な時の癖で何度も眼鏡の曇りを弄りながらアズールが言つと、その手を止めさせながらフロイドが覗き込んだ。小部屋に長身のリーチ兄弟が揃うと部屋が更に圧迫感を増す。

「ね、アズール。オレたち恋人なのに素気なさすぎね？」

恋人という単語を出すとアズールが僅かに怯むのを知っている。愛とか恋とかいう言葉をアズールは嫌う。実際にはジェイドとフロイドと深い恋愛関係にあるのだが言葉にするとならまぢ跳ねのける。案の定アズールは露骨に嫌そうな顔をしてフロイドから目を背けた。

「そんなことをわざわざ言いに？ 僕はお前と違つて忙し

いんですよ」

「は？ オレだってアズールにやれつて言われたことで忙しいけど」

アズールがフロイドの肉迫を避けようと身を振るとその方向はジェイドがしっかりと固めていた。狭い部屋の更に狭い隅つこに追いやられたアズールに、恨みがましくジェイドが言い募る。

「僕なんてアズールのご命令が出る前に動くよう忙しくお仕えしておりますがご不満ですか？」

「ええ。こうして行動を邪魔されることが不満です。——こんな所に連れ込んで……魂胆は見え見えますよ？」

「お部屋でお許しが出ないからこういう場所で迫るようになるんですよ」

セックスしようとして迫ってくる双子を視線で押し返そうとするが無駄だった。アズールをの小部屋に閉じ込めた時点で双子の性欲は上がるころまで上がつている。体で抵抗しても押さえつけられるだけと察したアズールはせめてもの嫌味を放つた。

「だからって薬品保管室なんかで盛るんですか。オクタウイネル生ともあろうものが、余裕の欠片もない」

三人を取り囲んでいる薬品は息を潜めるように静まっている。一カ所だけ薬品の置かれないテーブルがある。そこに

アズールをのせながらフロイドが口を尖らせた。ジェイドも珍しく同じような表情をする。

「他んとこダメって言いまくったのアズールじゃん。——部屋もダメ、YPRルームもダメ、部室もダメ」

「——他には植物園の隔離ゾーンや学園裏の森、営業後のモストロ・ラウンジもダメと仰いましたね。こんなにお預けされたら僕たち干からびてしまいます」

「そーだよ。どんだけ待たせるつもり？」

「まったく……忙しい僕を横にしながら性欲のことばかり困ったものですな」

ここで受け入れないと、更に揉めて時間が掛かるだけと判断したアズールは大仰にため息をついてみせた。僅かずつ押しやろうとしていた抵抗を完全に解いて自分から制服のネクタイを緩める。上は脱ぐつもりはないので次にベルトに手を掛けて外した。どうせここで言い論しても別の場所へ迫られる。それならここで済ます方が賢明だった。

「それならささっと済ませてください。僕をイかせなくてもいいのでなるべく手短かに」

——そうやって始まった味気のないセックスが済むと、アズールは一人で服を整えて去っていった。薬品に囲まれた棚に寄りかかりながらフロイドが首を傾げる。出すには出したがすつきりしない。アズールが欲しがらないとジェイドもフロイ

ドも満たされなかった。

「あれってさあ……。アズール本当にわかかってねーの？」

「そのようですね。満たされるセックスをしないからイライラして、イラつくので物事がうまくいかずに多忙になり——忙しくなった結果、僕たちを遠ざけて満たされるセックスが遠のく、そういう悪循環に陥っているんですがわかっていないでしょう」

「アズール、分析は得意なのに」

「ご自分の性欲に関しては鈍感なんです、アズールは」

ジェイドが困っていないのに困ったように眉を顰めて笑った。フロイドがその笑顔に乗っかる。

「ごてことはあ。オレらが手玉貸してやんなきゃね」

「ふふ。手取り早くいきましょ、フロイド」

微笑み合うジェイドとフロイドの宣言に偽りなく、数時間後にはアズールを落とすまでの準備は整っていた。

002

「さあ、お仕置き時間ですよ」

アズールの濡らす吐息以外に音の無い部屋に灯りが点いた。ジェイドのベッドの上、壁に寄りかかったアズールが何か言おうとするが口枷に遮られた。柔らかなが頑丈な手枷は

手首をひとくくりにとまどめ、伸びた鎖は壁の蛸足フックに吊るされていた。

部屋に入ったフロイドは全裸のアズールを追い詰める位置にのりあげた。内股に震える滑らかな足の間に無遠慮な指が入り込む。

「どうしたの？ 辛そうだねアズール。こゝ、とろとろ零しちゃつて」

「——ツンツ!! ンンツ」

フロイドが鼓膜に嘔きかけながらアズールの勃起しきつて震える先端に指を絡めた。指腹で数回抜いてからゆつくり降りていき、後ろのひくついた淫口に辿り着く。

「後ろまで滴つてるよ?」

「い、んんんん!!」

すつかり解れきつた柔らかい髪をぐにくと弄った後、指を尖らせてクチュンツと埋め込んだ。捕えられたアズールの全身が微震する。

「すこい、簡単に指入っちゃつた。この、ちよと入ったところの天井、きもちいんだよねえ? アズール」

「ん——ツん、ん、んツ!!」

くつちゆう……と指で肉壁を押し上げられたアズールは知らずに膝を上げてしまう。求めるような体勢になりながらフロイドの指にくつちりと責められる。中を押されるたび

にひくひくと震える陰茎を見下ろしながら不意にフロイドが覗き込んで目を合わせてきた。

「あ、でもアズールはイかせなくていいんだっけ?」

「ひ、ん、んんんんツツ!!」

涙目で必死に首を振るアズールに興奮したままフロイドが今更訊いた。どう考えてもさっきまでのアズールではない。感度も上がっているし潤んだ目は性欲しか訴えてこない。

「で、アズールに何しちゃつたの、ジェイド?」

「禁欲していたたいてるんです。とはいええつた数十分ですけどね。——本当は縛つて僕のベッドに何日も放置したいですが、そもいかなないので時間濃縮魔法で仕上げました」

「えげつねいな。今どんくらいイつてないことなんの?」

フロイドが問いかけるまでもなくジェイドはマシカルペンを振った。アズールの頭上に——本人には見えない位置に透過した数値が浮かんだ。

「今は禁欲二週間目になりますね」

「え? 14日間一度もイつてねーの。さすがにキツクね?」

「大丈夫でしょう。アズールは我慢強い方ですから」

勿体ぶった仕事でジェイドがアズールの口枷を外す。途端に振り絞るような嘆願の声が響き渡った。

「イきたいイきたいイきたいイきたい!!」

恥も外聞もなく叫ぶアズールは声を出すことでタガが外

れたように手枷をガチャガチャ動かした。悶える様を見下ろしながらフロイドがくすくす笑う。

「あは。全然ためじゃん。こんだけ焦れてんならあ、片手自由にしたら何しちゃうのかなあ」

「見てみます？」

フロイドと同じくベッドにのりあげたジェイドがアズールの片手の手枷を外した。一瞬の迷いもなくその手は腿の付け根に滑り込み、勃起しきつた細径をほったらかして淫口をぐちゅぐちゅ弄り始めた。

「あ、あ、あ、きもひいいトコっ、こりこりしたい、あっ!? い、い……いけなっ、い!? なんぞ、だせないっ、きもひいいのにっ」

アズールの突然の自慰を見下ろしたジェイドは音もなく服を脱ぎ始めた。

「まったく。いきなりメスイキしたがるなんて……期待を裏切らない方ですね」

ジェイドがぐと反った肉棒を啜えやすい位置で見せつける。アズールは目でそれを捕えながらも片手のぐちゅぐちゅした動きを止められない。

「は、あひっ……それ、ほしいっ……」

「こっちにもあるようアズール」

素直に欲しがるアズールの逆側からフロイドも頬にぶつけ

てくる。反り上がった肉棒を二本両脇から突きつけられたアズールは焦らされきつた薄げ声でねだる。

「あ、あああんっ♡ それほしいっ♡ ばれて、いきたいっ、なかずこす♡されていきたいのっ!! 指しやできたいっ」

「イかなくていーとか突っぱねたり、いきたいってねだったり好き勝手言ってくれんじゃん」

欲の籠った声で凄んでみせてからフロイドが両腿を軽く掴み上げてどちゅっ!!と淫口を貫く。

「あひ、んんんッ!!」

こまで薄げきり焦らされた淫髪は普段なら挿入だけで絶頂するはずだった。それだけの勢いで貫かれたが、禁欲の夕ガが外れないアズールは戸惑って困惑顔になる。

「なんで、きもひいいのに……いけない、感覚遠い……!! もっと挿れて、もっと奥まで抉って……ッ」

「無駄ですよ」

フロイドにくつちり挿入された淫口をジェイドが指先でなぞった。

「いけないよう『施錠』してあります。どんなに激しく犯されても解除しないとイけません」

「ひ……あっ♡」

フロイドがわからせるよう激しく音を立ててぐちゅぐちゅ抉り上げる。腿を大きな手で掴まれたアズールは来るはず

の絶頂に構えるがその波が襲つてこない。挿入されているのはわかるが研ぎ澄まされるあの瞬間が訪れなかった。フロイドだけが欲を味わつて亀頭で肉筒手前を突き上げてくる。

「いつもならこの角度で突いたらアズールすぐいつちゃうのにね、マジでイケねーの」

「い、いけないの、イきたいい!! くくやだ、もう焦らすのやだ!! ずすでイかせてよお!!」

「アズールが僕たちを焦らすから悪いんですよ」

フロイドに向かつて訴えかける顎をジェイドが掴んで持ち上げた。アズールの濁けて喘ぐ唇に指を這わせながら目元を陰らせて微笑んだ。

「百回ごめんなさいしたら解除してあげましょう」

003

アズールの頭上の謝罪カウンターが数字を増やしていく。片手の自由を奪われたままフロイドに犯されると謝る以外の声も漏れてしまふ。性感だけはどんどん高められるのに張つめた膨らみを爆発させられない。

「ひ、んっ!! そんなに突いてもイケないのやだ!! もういかせてよお!!」

「だから百回あやまつて言つてんじゃん」

煽るフロイドにはちゅばちゅ突き上げられ顎を反らす。既に何十回も謝らされたアズールは横道に逸れる声を引き戻して謝った。

「ひっお、おごめんなさい……こんな太いの抜き差ししたらすぐイけるのに——いけないッきたいあ、あおっ!!」

「おねだりしても謝んねーと気持ちいいのこねーよ?」

「あ、ごめなさ、ごめんな、さああんう!!」

焦つて連続で謝ろうとする顎を掴まれ、謝りきらせないとばかりにアズールの口をジェイドの肉棒が遮る。張りつめた亀頭に唇を割られると口の中が一杯になる。ジェイドは鈴口から零れたカワバ液を舌に擦りつけてきた。

「謝つてるアズールのお口に突つ込むの気持ちいいですね」

「は、うあ……やえ、く……」

口を塞がれて謝れないと悦境を迎える時間がどんどん遠ざかる。アズールが顔を背けて口から肉棒を追いやると、ぶるんと飛び出した亀頭が頬を叩いた。

「あ……うあひ、い、いわせてよおおっ!! あやまらせて、お、おおんんっ!!」

「おや。逃げないでください。せつかく気持ちいいのに」

ジェイドが今度は逃がさないとばかりに両頬を捕まへ、くつちり喉の奥に埋め込む。性的な刺激は感じるのに変わらず疼きは発散されない。

「んぐぐ、んび!!」

「それに機械みたいに繰り返すだけではつまらないですよ、アズール」

「そーそー。なんで謝つてんのかちゃんと言いなよ」

「ひ、あひ……」

二人に詰め寄られ、喉で締めながらくくくと頷く。栓になつていた肉棒を喉から抜かれるとすかさずごめんなさいが漏れた。言葉繰りを考える暇さえ与えずフロイドがラストスパートで全力で突いてくる。どちゅどちゅ擦られる淫裂を頸を引いて凝視してしまいがらアズールは涙を散らして声を振り絞る。

「イ……イかなくていいつてはねつけてごめんなさい!!

そうけなくしてごめんなさい、ああッ、ほんとほしかったのに嘘ついでにごめんなさいッ……!!」

「やべー。かわいすぎて出るわ」

ジェイドとフロイドの肉棒に謝っているような必死さに、機嫌を直したフロイドがぎゅちゅと含むのを感じる。肉壁がぞくぞくと収縮するのに堰き止められた絶頂は来ない。

「い、いや、やだ!!」

「あー出る出るきもちい!!」

泣き喚く顔を見下ろしながらフロイドが射精衝動をあえて口にした。遅しい肉棒が勢いよく射精する動きを味わわ

されたアズールは首を振つて喚き散らす。

「やだほくもッほくもいきたいいいいッ!! ごえなさい……いかせてッ、もおゆるして!! いかせてよおッ!! あ、ああ抜けちゃう——やだ!!」

「はいオレ終わりく。ま、後はジェイドに頼みなよ」

普段なら平気で抜かずに二連発してくるフロイドがわざと終わりを示唆して抜き切った。アズールは淫猥な焦らしで泣き濡れた目でジェイドを見上げる。

「ね、ねえジェイド……もうがまんれきなさい……ッ! いきたいッ」

「おやおやそんなに必死にねだられたら、挿れたらすぐに出してしまいそうです」

くすくす笑うジェイドがカリ下を指の輪で締めつけ、より大きくなる龟头をアズールに見せつける。もう理性はとっくに消え失せアズールの体を支配するのは絶頂を欲する本能だけだった。髪を振り乱しながらアズールは空いた淫口を片手で弄る。

「ひやだ……やだ……ッ!! ごめんなさいつて、いっばい言つたあッ……!! もうやらああ!!」

本格的に泣き出すアズールの頭上のカウントをジェイドとフロイドがちらつと見た。残り数回であることはアズールにはわからない。耐えきれずにくちくち弄る指を見下ろして

フロイドが含み笑した。

「弄るの早いんじゃないアズール。ま、オレたちが全部出しちゃった後に解除したらオナニーするしかないもんね」

「ふむ。そっちの方が見応えがありそうです」

なかなか挿入しないジエイドがそのまま抜いて出した場合を想像したアズールが震撼する。性欲を出しきり冷めきった状態のジエイドとフロイドに見下ろされながら無様に自慰でよがる姿は耐えられなかった。錯乱しかけたアズールは、弄っていた手を離して二人を交互に見ながら「めんなさいを連呼した。

「ぞだ!! オナニーなんかするのやだああ!!」「ごえんなさいッ、ジエイドとフロイドのイきたいです……だめつていつてごめんなさいッ、おねがいだしきらないで……おやましますからあぁッ!!」

泣き謝罪に昂奮したジエイドがアズールを捕えている片手の手枷を外した。ベッドへと枕を積み上げてアズールの頭を置き、腰を限界まで折り曲げて杭打ち体勢に入った。Uの字に曲げられたアズールは強調された挿入口から目を離せない。ジエイドは張りつめた亀頭の先端をくちゅうっと割り入れる。カリまで入りきらない浅さ3cmほどの挿入で襲をくちゅうくちゅう弄つてくる。

「この体勢で何をされるかわかりますよね、アズール」

「あ、お!? くく奥までくるやつ、それ、まつて……解除してから——ッ」

めきめきめきと割り込んでくる肉棒に淫口を割り広げられ、アズールの目が大きく見開かれる。何度もこの体勢でイカされたことがあった。凄まじい快感が背骨を抜けばくびく療摩しながらイけるはずなのに、その感覚が遠いままだうた。熱い先端に深い場所を抉られ始めたアズールは解除を求めて必死に謝る。

「ごめ、ごめ、ごめんらさい、ごめんらさい、ごめんなひやあ、あああ!! それでイきたいです!! 突くのまつてくたさい……ッ!!」

懇願の合間に、ぐぬ——と引き抜かれはあはあと息を上げる。だがアズールが気を休める暇もなくジエイドの亀頭は焦れるように淫襲に触れながら首を振った。

「イキきれないアズールの肉筒、締めつけて離してくれませんか? こんなぞわざと動かされたら」

言い切らない内に、すつく!! と奥までめりこまされ両足の爪先がバラバラに暴れて引き撃る。

「あひびいッ、やえ……おく突いちや、まつてジエイド」

「いえ、もう待てません。待てばかりで限界です」

ぐつと垂直に引き抜かれたアズールが張り裂けんばかりの声で叫ぶ。その先端が弁をプチ抜く絶頂を何が何でも味

わいたかった。ぼろぼろ泣きながら「めんなさいを繰り返すアズールにジェイドの太棒が突き下ろされる。

「めんなさいっ!! っばい焦らしてめんなさい、い、い、い、い、い、い、い!!」

謝罪カウンターが光って消え、禁欲が解除される一番気持いい瞬間に結腸を抜かれたアズールは絶頂に絶叫した。浮腫はひくひくと収縮し肉壁がぎゅちゅちゅと締め上がる。余りの快感の塊を叩き込まれ全身が引き撃つてぶしゅつとセルフ顔射した。百回謝りきったアズールの最奥をジェイドの肉棒がぐすっずぶんと突き続ける。

「おひあ!! あ!! あ!! バッバツ!! おくくおく、突かれて、い、い、い、い、い、い、い!! おひバツとまんら——
おあ!! い、またい、く、う!!」

ジェイドが根元まで埋め込むだけで容易に弁を突き抜かれる。いつている最中に容赦なく抜き続けられメスイキが絶えず全身に走り続ける。

「あ!! あひ、あおっあッ!! お、お、う……抜かえておかひくなるう、う、あッあッあああおあ!!」

二週間分の悦楽が一気に襲ってきて既にアズールの焦点は合わない。凄まじい絶頂に頭の中は錯乱し目の前はチカチカと点滅してくる。ジェイドもアズールのイキ痙攣を味わうよう、からかつのを止めて無心で最奥を突いてくる。

ぶしゅ、ぶしゅつと半勃ちの細径の先端から潮が流れ落ちる。ずんずんと真下に突いていたジェイドが両腿を固定して一際激しい勢いで突き下ろした。結腸奥を深く突き抜かれたアズールが全身をびきりと引き撃らせ絶叫する。

「おひい、い、い、い!! いく……いく……いく……い、い、い、い、い、い、い!!
イぎゅつ……!!」

叫んだ後きつく菌を食い縛ったアズールは、じまっばと潮を吹き散らかし暗幕を勢いよく落とすように失神した。

004

(落ちてく……沈んでく……すくすく下まで、落ちてく……のきもち……)

とても柔らかな場所で眠りに落ちるアズールは浮遊感のある落下を味わっていた。体の緊張が全て解れどこにも苦しいところがない。さっきまでは激しい快感が連続したが、いま体を覆うのはゆつたり包み込まれるような快適さだった。

(だめ、まだ、寝ちゃだめなのに……今夜やることあるのに、落ちたい、このまま……)

性欲を満たしたアズールは、次なる本能である睡眠に沈んでいった。葛藤もほんの一秒に満たず、考える時間すらなく脳が休止する。凄まじく働かせた後の脳を完全に休ませ

るのは別種の快感を生み出した。

「——はッ……!!」

ぱちと目を開けると視界がぼやけていた。何かがあまりに近くに迫っている。眼鏡無し視力はどうやらフロイドの胸板であることがわかった。ぱちりと目を開けたアズールは焦つて腕枕から起き上がった。いつの間にもフロイドのベッドに移動させられ、ひとつ向こうの椅子にジェイドが座っていた。起き上がったアズールは優しい笑顔で迎えられる。

「おや、お目覚めですか」

全裸のフロイドとアズールと対照的にジェイドは服をしっかりと着ていた。この時間にしては不自然だったが、それに構っている余裕はアズールにはなかった。あの深い眠りの感じだと数時間寝てしまったに違いない。ジェイドが服をしっかりと着ているのも外に出る時間だからかもしれない。

「一体いま何時だ……っ、ああ、僕がアラームもかけずに寝落ちするなんて!」

「ん、どしたのアズール。さっき寝たばっかじゃん」

騒ぎ立てると横に寝転がったフロイドが肘で起きあがった。ベッドから下りようとするジェイドが逆のように時計を差し出した。そのデジタル表示を見てアズールの動きがびたつと止まる。まだ一時間も経っていないかった。

「え……、あんなにいつは寝たのに!」

「どうやら深く眠れたようですね。お加減ははどうですか」
問いかげられるまでもなく答えは出ている。この頃ずつと

悩まされていた妙な体の重たさや集中力の無さが一気に改善していた。アズールはべたんと座つたまま大きく目を開く。心なしか眼鏡のない目の視力まで上がった気がする。

「頭が冴えて体が軽い……つまり僕は慢性的に寝不足だつたということですか」

「そーだよ。頭使つてはつかで運動してねーからあ、ぶつ飛びまでイかせたの。よく寝れたでしょ?」

フロイドが立ち上がりながら服を着る為立ち上がる。フロイドが袖を通すのは部屋着ではなく寮服だつた。これから寝るだけなのにと訝しんだアズールが思わず問いかける。
「フロイド、今から何を?」

「何つて、その命令はアズールがするんじゃない」

既に寮服を身に着けているジェイドがアズールの着替へを恭しく持ってきた。ジェイドの手に助けられつ寮服を身に着けたアズールは二人を警戒の目つきで見上げた。

「セックス後のフオローがやたらに手厚いですね。一体何を企んでいるんです?」

「あゝ逆。やりたいことやらしてくれたから言うべきうかなあつて」

「そつですよ。今の僕たちは心からアズールのお役に立ち

「はいんです。性的な不満がすっかり解消しましたので」

「アズールは？ すつきりした？」

無邪気に訊いてくるフロイドに思わず素直に頷いてしまふ。だがジェイドもフロイドもからかわなかつた。アズールの多忙によつてじわじわ積み重ねられた三人の不満はさらきのセックスで綺麗に水に流された。ジェイドのベッドすら綺麗に整え直されているので何もかも快樂の夢だつたまうな気もしてくる。

まだ夜の始まりの廊下に踏み出しながらモストロ・ラウンジへ向かう途中、フロイドが宙を見ながら呟いた。

「あ、大事なことを忘れてた」

フロイドが立ち止まって前に来るとアズールは少し構えた。さらき散々泣かされたセックスを忘れてしまうほど便利な脳はしていない。だがフロイドは無情な欲求をぶつけたりはせず、初々しいほど丁寧な顔を斜めに傾けてキスしてきた。

「やはり先にいたたたきたいですね。これも僕たちの給与の一部ですから」

フロイドが唇を離すと今度は逆側から奪うようにジェイドが唇を重ねた。アズールが黙り気味なのは引いているのではなく、こめんなさいの絶叫を繰り返させられて喉が整わなただけだつた。

「さあ、命令を、アズール」

「何すればいい？」

その命令を受けるのが嬉しいとばかりに微笑み立つ二人を前に、アズールはすうつと息を吸い込んでから滑らかに指示を出し始めた。恋心と睡眠と性欲が満たされきつたアズールは深い慈悲の笑みを湛えていた。

天国を

寸止め

COLOPHON

サークル：**wmT** (ダブルエムティ)

【原案/小説】しゅうすけ

PixivID=4398081

【表紙/漫画】サノトウヤ

PixivID=1594064/Twitter@Letters_end

wmt.11235813@gmail.com

<https://zeroshiki.wixsite.com/withmytears>

印刷所：株式会社 栄光

発行日：2023年6月25日



↑マシュマロ

※本作品のweb上への転載や盗用、ならびに
オークション、メルカリ等への出品を禁止します。
Do NOT repost or use our artworks.

Twst Fan Book Vol.15
Jade & Floyd × Azul



wmT